

## 博物館の教育利用

### Systematic Use of Museums for School Education

米 田 耕 司\*

Koji YONEDA

#### 1. 身近な博物館

1960年代後半以降の博物館ブームと呼ばれる一連の現象をふりかえると博物館の設置数はもとより、博物館をとりまく状況が大きく変化していることがわかる。今や、「あなたの家の近くにも博物館があります」「身近で役立つ博物館の利用を！」という呼びかけが現実のものとして実態を伴ったものになってきているといえよう。めざましい博物館の整備状況は、文化的な地域格差を着実に解消しつつある。こうした状況の中で、博物館を単に「建物」としてみるのではなく、その活動内容についての議論や関心が博物館界以外からも高まってきている。10年前には、日本博物館協会や文部省等博物館内部での刊行物が中心的であった博物館のガイドブックや専門図書等が、今日では、分野別、目的別等多種多様の博物館関係の図書が市販されている。内容も豊富であり、博物館に対する国民的な関心の広がりを示している。新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等のマスコミにおいても博物館に関する話題が一昔前の状況とは大きく異なり、質量共に大きく変化してきている。

このような状況を背景に、博物館は、従来にも増して国民の文化的生活と広く深く結びつき始めている。生涯学習（教育）の拠点的機関としての博物館の存在価値は、地域格差を解消し、それぞれの地域の実状に相応した形で整備しようとする住民と博物館関係者の努力に深くかかわっている。生涯学習がユネスコによって提唱されて10年が過ぎたが、その実現は、遠い将来のことと思われるものが、不十分ではあるが、実質的には身近なものと感じられるようになってきている。そのことは国民の学習活動の動きとして〇〇カルチャセンターの盛況ぶりからも理解できる。しかし、国民的な規模での生涯学

習が展開しているという面からは、まだまだ不十分な状況であり、一部には、学校教育を修了したら、もう教育されるのはいやだという教育に対する反感や暗いイメージが存在していることもまた事実としてある。

近代博物館は、市民本位のものである。しかし、長い間、博物館の設置が不十分であったこともあり、博物館を身近なものとして感じられず、食わず嫌いにも似た状況が一部にまだある。とりわけ、中高年齢層にとっては、青少年時代に博物館で学習するよるこびを体験した人はそれほど多くない。ところが、最近では、子どもたちの博物館に対するイメージが、「明るく楽しいためになるところ」へと変化してきている。一つには、博物館自体の努力にもよるが「見せてやる式」の古い考えの方の博物館から利用者主体の市民参加を前提とした開かれた博物館への変化も大きな理由になっている。子どもにとって面白い博物館、子どもの気持ちに帰れるような博物館の存在がきっと良い作用を起しているのだと思う。

#### 2. 博物館の利用促進事業

博物館の普及活動として、千葉県教育委員会では、1977年より博物館利用促進事業を推進しているので例示したい。博物館が名実共に身近で役立つところとなるために、県民が、博物館を通して生涯にわたって学習し、学ぶ楽しさを味わう場となることを目指している。主な内容は、日常の広報活動で博物館特集や行事の案内等を通じ直接県民に博物館の利用を呼びかけたり、県立博物館（6館）ネットワークを生かした、同一資料による巡回展の開催。県民に、博物館の存在や事業等を紹介すると共に、その役割を知らせ、利用方法などの理解を図るため、社会教育や学校教育の指導者を主な対象とした普及資料の

\*よねだ こうじ 千葉県教育庁文化課

（原稿受理：1981年12月18日）

作成をし、毎年2,500部発行しており県内の小・中・高校や図書館・公民館など学校教育、社会教育の機関等に配布し、組織的な学習活動と呼びかけている。とりわけ1979年以後3カ年継続している学校教育との連携の取り組みについては、博物館利用の基礎的な底辺の拡大を目指す運動として位置づけている。学校教育に期待するのは義務教育の時代に生涯学習の基礎を体得させ、自己学習の習慣を身につけさせてほしいということである。博物館をはじめ図書館・公民館等を積極的に利用できる子どもを教育することが、形式的な学歴主義や資格などよりも知的生活を豊かにしていく上では有意義であると考えられる。子どもの主体的努力、教育の積極的な働きかけ、環境の果す役割を重視し、どの子どもにも主権者として生きる能力を獲得させるという立場から教育の機会均等の精神を再度確認し、博物館の利用のあり方を考えていく必要がある。そのためには、教師自身も博物館の利用を通じて生涯学習への興味、態度、方法を身につけていかなければむづかしい。そして、博物館もまた、事業内容の改善、組織の充実のため力を蓄え、発展を図らなければ実現はむづかしいものとなる。

現在も実施中の博物館協力校の事業では、県立博物館6館が、それぞれ地元の小・中学校の中から1校を協力校に委嘱し、年間の研究主題を決めて組織的・継続的な学校利用の開発を図っている。地道な努力を重ね、博物館活動の改善に反映させる一方策でもある。ここでの実践の成果と反省が、県・市町村教育委員会初め博物館、学校双方に経験として蓄積し、地域社会に役立つ博物館としての成長を促す基礎となっている。

### 3. 協力校の成果等

実践事例の具体的な内容は多様である。ここでは、過去2年間の活動の中から成果として、児童・生徒の博物館に対する関心と理解が深まり、次のような気持の変化が生まれているので紹介する。

①教室での学習課題を、博物館で実物に接することにより確かな手ごたえとして感じ取っており、このことが子どもたちの博物館に対する親しみと喜びを引き出している。つまり、実物に接した感動はすばらしく、子どもたちをとらえて離さないこと。

②博物館に対して“入館しにくい”というイメージをもっている子どもも、集団で何度も見学に行っているうちに“親しみやすいところ”と感ずるような気持の変化が生じてきている。つまり、何回も博物館に連れていくということが、動機づけとして初歩的段階での大切な役割

を果たしているということ。

③一人1研究・グループ研究等において、問題意識をもって博物館の実物資料等を見たことにより、科学的で実証的な学習法が会得でき、博物館学習のおもしろさを知り得たこと。

④博物館のおもしろさを知った児童・生徒の中で、夏休み等の休日を利用して自主的に一人調べなどの調査をするようになったものも増えている。また、祖父が、昔使用していた漁具が自宅の物置に放置されているのを発見し、郷土の文化財として“モノ”の裏にある歴史的価値を再発見するようになった子どもなどが報告されている。

⑤博物館を利用するようになって以来、従来の静的な学習から動的な学習への態度の変化がみられ、調査や巡検活動を主体とした社会科本来の望ましい学習ができるようになったこと。

⑥博物館を利用した子どもの感想に“今度はお父さんやお母さんを連れて行きたい”というものもあった。学校から家族ぐるみの利用へと、地域に根ざした輪の広がりが期待できること。

以上の成果を生み出したのは、学校の教職員と博物館職員の協力体制のたまものである。

### 4. 今後の課題など

協力校との実践研究は、現在も3カ年目の取り組みをしている最中である。過去2カ年の実践報告を「小・中学校における博物館利用事例集」(Ⅰ・Ⅱ)として普及資料にまとめ刊行した。博物館もそれぞれ実践過程で学習ノート、見学のしおり、利用の手引き等を独自に作成し、改善に努め現在も多くの学校や団体利用に教材の一つとして利用されている。

この間いろいろな質問も受けた。教師及びその集団が、この事業の中でどう変わっていったのかというものが多かった。

協力校の教師集団は、全員で博物館に出かけ、自分の授業を中心に、博物館資料をどのように授業に生かしていけるかの教材化の取り組みをつづけており、目的意識的に博物館を見直すものも増えてきている。

また、最近では、郡の社会科教育研究会と地元の市教育委員会の後援を得て、協力校(小学校)と博物館の共催による博物館利用学習公開研究会が開催された。3年生の「市のうつりかわり ― 古い道具を調べる ―」や4年生の「土地と人間 ― 海べに生きる人々 ―」といった授業の展開を博物館の展示室や集会室を使ってそれぞれのクラスで実践し、その後研究討議を行うところでも

てきている。

最近の話でこんな議論があった。博物館の職員から協力校の教師に対しての質問。実際問題としてゆとりの時間を利用して博物館を利用するのは大変ではないか。博物館を利用しなくても授業はできると思う。教師が博物館を利用するポリシーを確立していかないと本当の利用はできないのではないか。

これに対して、教師の方々の回答。学校でもこのことは問題になっている。小学校の場合、教科指導の面から利用すると、4年と6年以外は、遊びになってしまいがちである。しかし、博物館に実物があるという強みは意外なほど大きく子どもたちをとらえている。博物館を利用しないと本当のことがわからないというのが博物館の強みだと感じている。しかし、学校の側が博物館に何があるのかを知らなければ無意味である。もっと学校と博物館が普段着でつきあえるようにならなければいけないと思う。

別の教師。博物館を使わなくても授業はできるという考え方は学校にも現実としてある。しかし、それをそうではなくそうと言っている。教科書と黒板による授業からどうやって抜け出して行くかという立場を私たちはとっている。博物館の資料で授業に必要なものが全てそろっているとは考えていない。学校からこういうものが欲しいという要望に博物館はどこまで対応できるのだろうか。遠くの学校は行きたくても足がない。教室での黒板と教科書の授業はできても、真に豊かなイメージをもった(歴史)学習はできない。

また別の教師。実物を見る強みもそうだが、その評価をすることが大事。評価が甘いのだと思う。気づかせる努力。気づいたことを認めてやることが大事だ。

また、別の教師。博物館を利用して学習するようになってよかった。感動というものは博物館のふれあいで行っている。ただ単に机を並べて勉強するだけでなく、生き生きと子どもたちがしていることがうれしい。眼の輝きが違う。教職員としては、調べる時間や研究の時間がなかなかとれず、そうした時、博物館に行くと考えerヒントがいっぱいある。博物館の学芸員と相談すると言葉の知識のみでなく、各種の資料をふまえて教示をされることは何ものにもかえがたい魅力がある。教師は、博物館を利用すれば目ざめるのだが、博物館に行ってみようとするまでの心のギャップが現実としてあった。

以上、教師と博物館人との対話の中でこのひとこまではあるが、正直に話しあう努力が今必要な時であると思う。

現在の実践研究での共通目標は次の5つである。

- ① 教科学習の範囲の拡大
- ② ゆとりの時間の利用
- ③ 生涯学習(教育)の一環として日常的な利用の推進
- ④ 博物館相互の連携による利用の拡大
- ⑤ 博物館周辺の文化財等の利用の拡大

共通目標をふまえながら、地域の実情に即した多様な実践活動が、現在も進められている。むしろ緒についたばかりというところである。

## 5. おわりに

思いつくまま、整理されていない状態での概要説明となってしまった。博物館は利用促進までして利用させる必要があるのだろうかという意見もある。つまりは試行錯誤である。この中から一つでも二つでも地についた博物館活動を促す勇気が生まれてくればそれが成果であると今思っている。